

司式:山本典子

奏楽:山田絵里

前奏:「天にいます 我らの父よ」(J. プレトリウス)

招詞:わたしは知っている。わたしを贖う方は生きておられ、ついに塵の上に立たれるであろう。(ヨブ19:25)

讃美歌:19「み栄え告げる歌は」

交読詩編 23

- 01【賛歌。ダビデの詩。】主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない。
02 主はわたしを青草の原に休ませ/憩いの水のほとりに伴い
03 魂を生き返らせてくださる。主は御名にふさわしく/わたしを正しい道に導かれる。
04 死の陰の谷を行くときも/わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。
あなたの鞭、あなたの杖/それがわたしを力づける。
05 わたしを苦しめる者を前にしても/あなたはわたしに食卓を整えてくださる。わたしの頭に香油を注ぎ/わたしの杯を溢れさせてくださる。
06 命のある限り/恵みと慈しみはいつもわたしを追う。主の家にわたしは帰り/生涯、そこにとどまるであろう。

朗読聖書①イザヤ書 29. 17-19

◆イスラエルの回復

- 17 なおしばらくの時がたてば/レバノン は再び園となり/園は森林としても数えられる。
18 その日には、耳の聞こえない者が/書物に書かれている言葉をすらすら聞き取り/盲人の目は暗黒と闇を解かれ、見えるようになる。
19 苦しんでいた人々は再び主にあつて喜び祝い/貧しい人々は/イスラエルの聖なる方のゆえに喜び躍る。

朗読聖書②ヨハネによる福音書 16. 16-24

◆悲しみが喜びに変わる

- 16 「しばらくすると、あなたがたはもうわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる。」
17 そこで、弟子たちのある者は互いに言った。『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる』とか、『父のもとに行く』とか言っておられるのは、何のことだろう。
18 また、言った。『しばらくすると』と言っておられるのは、何のことだろう。何を話しておられるのか分らない。
19 イエスは、彼らが尋ねたがっているのを知って言われた。『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる』と、わたしが言ったことについて、論じ合っているのか。
20 はっきり言うておく。あなたがたは泣いて悲嘆に暮れるが、世は喜ぶ。あなたがたは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる。
21 女は子供を産むとき、苦しむものだ。自分の時が来たからである。しかし、子供が生まれると、一人の人間が世に生まれ出た喜びのために、もはやその苦痛を思い出さない。
22 ところで、今はあなたがたも、悲しんでいる。しかし、わたしは再びあなたがたと会い、あなたがたは心から喜ぶことになる。その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない。
23 その日には、あなたがたはもはや、わたしに何も尋ねない。はっきり言うておく。あなたがたがわたしの名によって何かを父に願うならば、父はお与えになる。
24 今までは、あなたがたはわたしの名によっては何も願わなかった。願いなさい。そうす

れば与えられ、あなたがたは喜びで満たされる。」

祈祷

聖なる神さま、創像主の尊き聖名を賛美いたします。御国を待ち望みます。その備えを日々私たちができますように。

神さま、私たちは過ぐる主の日の礼拝の場から、平和を告げる使者の勤め的一端を担うべく送り出されました。その歩みは心もないものであったかもしれませんが、主が日々共にいて守ってくださり、必要なもので満たしていただきました。そしてこの礼拝へ再び招いてくださったことに深く感謝いたします。この場に集っている者、オンラインで集っている者、置かれた場で礼拝を覚えている者、共々、この礼拝において真の悔改めによって新しくしてください。病や介護、心身の弱り、孤独、悲しみ、苦しみの中にある教会の肢々が主が傍にいて励ましてください。そして私たち心を一つにして教会の 102 年目の歩みを神さまの御心に適ったものとできますように。また教会学校を含めて新たにこの教会へ招かれ一人一人を神さまが祝福してください。

神さま、今世界には戦争紛争が数多く起きています。特にイラン、ウクライナ、ガザの戦争が 1 日も早く病みますように神さまの助けを切に祈ります。どうか神さまから与えられた全ての命を互いに守ることが何より大切であることを国の指導者たちが気づきますように。国内では自然災害や自然との共存のトラブルが同じような場所で繰り返され、胸を痛めております。これ以上被害が起きませんように皆が安心して過ごせますようお守りください。

神さま、本日の礼拝の説教者として笠原義久先生をお迎えすることができ、心より感謝申し上げます。笠原先生が聖霊に満たされて聖書の御言葉を心豊かに取り継いでくださいますように。また私たちが心の扉を開いて御言葉をしっかりと受け止めることができますように導いてください。

本日の主の日に世界や日本の各地で行われている教会の礼拝が、神さまの栄光を指し示すものとなりますように。この祈りを救い主イエス・キリストの聖名を通してお献げいたします。アーメン。

讃美歌:430「とびらの外に」

説教 「イエスと再会する喜び」

笠原義久

お読み頂いた今日のヨハネ福音書の箇所は、「今キリストはどこにおられるか」、言葉を変えて言えば、「私たちはどこでキリストにお会いできるか」、そういう問いに答える第一級の聖書箇所であると言うことができますと思います。

ヨハネ福音書のこの箇所は、少し前の 13 章、「イエスが弟子たちの足を洗われる出来事」に続いて長く語り続けられた言葉の一部であります。13 章以降は、「主イエスが弟子たちから離れて父の元へ行かれる」ことを一貫した主題としています。つまり「主の不在の時が始まる」、この「不在の時」の中で、それが「弟子たちにとって一体どういう意味を持っているのか」を主題として語っています。

イエスは切迫しているご自身の不在、居なくなるということ、またそのことの故に、「ご自分という存在の限られた時間がどのようなものであるか」を語るために、これまでも「しばらく」という表現を何回か用いてきました。けれども今日の聖書箇所 16 節以下に限って言うと、この「しばらくすると」という言葉が続けて 7 回(16:16, 16:17, 17:17, 17:18, 19:19)も用いられています。18 節では、弟子たちが互いに問い交わしたのも、この「しばらく」とは「いったい何を意味するのか」

ということでした。

この「しばらく」という言葉、新約聖書の元々の原語ギリシャ語は「ミクロン（μικρόν）」と言います。「ミクロン」、今日では極めて小さい単位を表す言葉としてよく知られています。もちろん“ごく短い時間”、「ミクロン」とはそういう意味を表しているわけですが、聖書では「時間」は、単に“長い・短い”という“量的な時間”というよりは、“質的な時間”、“中身を・内実を持っている”時間のこと、一般的には“聖書における時間とは、終末論的な意味合いが強い”と言われています。新約聖書の背景にある最初の頃の教会は、“終末・この世の終わりの時、キリストがやってこられることによって世が完成する”ことを待ち望んでいました。“キリストがやって来られ、それによって世が本当の意味で完成するのだ”という“終わりの時”についての見方・考え方を“終末論”と言ってきました。ヨハネ福音書のここでの「ミクロン・しばらく」とは、或る意味で、この強烈な終末論的期待の期間を指している、神の新しい時代の接近を呼び起こす、そういうことのために、ここで「しばらく・ミクロン」という言葉が用いられているように思います。

ヨハネ福音書と一緒に読みいただいたイザヤ書、旧約聖書をギリシャ語に訳した聖書、『70 人訳』と言われている聖書では、イザヤ書のこの箇所（17 節（なお）しばらく（の時））に「ミクロン」という言葉が用いられていますが、これはこの預言者の、或る意味での“終末論的な意味合いを言うために用いられている”と言われています。“しばらくの間・ミクロン、隠れよ、激しい憤りが過ぎ去るまで”、あるいは「なおしばらくの時がたてば、レバノン は再び園となる」、このように「しばらく」という言葉は、この強烈な“終末論的な期待を指す、神の新しい時代の切迫を呼び起こす”ために用いられていると考えて良いと思います。

そういったことから、このヨハネ福音書の 16:16 以下の「しばらく・ミクロン」というのは、“イエスが天から再びこの地に来られる”、つまり“イエスの再臨”、“再臨”という言葉が使われますが、“イエスが再び来られるその時を指す”という理解があります。16 節「しばらくすると、あなたがたはもうわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる。」とありますが、ここではイエスの約束の終末論的な意味合いが強調されていると考えてもいいかもしれません。“天に属する、天にいらっしゃる主が再び地上に来られることが確実に起こる”、しかも“すぐに起こる”、それは“主イエスと弟子たちとの再会の出来事”なのだと。そして 22 節以下によれば、“その時、弟子たちは喜びに満ち、神との本当に親しい関わりは一点の曇りもない”ように思われます。ですから、“しばらくするとイエスを見るようになる”、それは“キリストが再臨されて、そのことによる救いが完成される時、そのことを預言しているのだ”、という理解がここでも成り立つかもしれません。

しかし今日のヨハネの聖書箇所が一番大きいポイントが、果たして、この“キリスト再臨の預言”に置かれているのかどうか、ということについては、もうもう少し、このヨハネ福音書の聖書箇所そのものに立ち入ってみる必要があるように思われます。その際、ポイントとなっているのは 16 節で語られている「見る」という言葉、この言葉もまた何度もイエスによって繰り返し語られています。

新共同訳聖書で、「見る」と訳されている言葉は二通りの言葉が元の言葉にはあります。一つの言葉は「会う」という意味で用いられています。例えば、22 節には「ところで、今はあなたがたも、悲しんでいる。しかし、わたしは再びあなたがたと会い、あなたがたは心から喜ぶことになる。その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない。」とあります。この 22 節直訳は「しかし私は再びあなたがたを見る」ですが、新共同訳聖書では「わたしはあなたがたに会い」とあり、そのことによ

って「あなた方は心から喜ぶことになる」とあります。ここで語られているのは“主イエスを奪われ、泣いて悲嘆にくれている弟子たちがイエスとの再会を喜ぶ”という出来事です。弟子たちがイエスを見るのではなく、イエスが弟子たちを見る出来事としてこのことが起こるのです。主イエスの方から会ってくださる、だから弟子たちも主イエスを再び見るのが可能になるというのです。ここでの「会う」は、もっと強調すれば「訪問する・訪ねてくださる」と訳すことも可能です。“イエスが弟子たちを尋ねてくださる時が来る”、そして“そこで与えられる喜びはもはやミクロン・極めて小さいものではない。弟子たちの喜びはもはや誰によっても奪われることはない永遠のものになる。”と言われているのです。

この「見る」と訳されている元の言葉のもう一つは、まさにそのもの、“肉眼をもって見る”ことを言い表しています。ですから 16 節、「しばらくするとあなたがもうわたしを見なくなるが、またしばらくするとわたしを見るようになる」は、“弟子たちはもはや地上のイエスを見た肉眼ではなく、信仰の目をもって復活のイエスを見るようになる”ということになります。「肉眼」とか「信仰の目」とか言うとき私たちは新約聖書『ペテロの手紙一』にある言葉を思い起こします。1:8「あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じている」と。著者ペテロは肉眼でイエスを知ることができた一人でありました。イエスの弟子であった使徒ペテロが書いたと言われている手紙ですが、実際にイエスを肉眼で見、知ることができた一人でしたが、仲間の教会員はそうではありませんでした。彼らは肉眼でイエスに会うことはありませんでしたが、そのイエスを愛する喜びに溢れている、それは復活されたイエスにお会いしたことゆえに本当に喜んでいるからでしょう。死者の中からのイエス・キリストの復活が生み出した活き活きとした希望が彼らにはこの与えられている、そのことを心から喜んでいるのです。ですから今日のヨハネ福音書 16:16「しばらくするとあなたがもうわたしを見なくなるが、またしばらくするとわたしを見るようになる」というのは、まず何よりも、この復活の出来事における主イエスと弟子たちとの再会のことが語られているのだと考えるべきでしょう。実際この 22 節では、主ご自身が弟子たちを「見る、会う、訪れる」ことが預言されています。弟子たちが主イエスを「見る、お会いする」のに先立って、イエスの方から、主ご自身が弟子たちを「見る・訪れる」と言われているのです。

このヨハネ福音書が続く 20 章、21 章で伝えている復活についての記事は、例外なく“復活されたイエスがまず弟子たちを尋ねてくださり、会ってくださる”、そのことが先行しています。主イエスが復活されたあの朝、墓の外で“マリアよ！”とマグダラのマリアに声をかけてくださったのは主イエスでした（20:16）。そして復活された後もなお、16:20 の言葉が生きているかのよう、に、世を恐れ、ユダヤ人たちを恐れてひっそりと入り口に鍵をかけて閉じこもっていた弟子たちを、まず尋ねてくださったのはイエスであります（20:19）。またなぜかテベリアス湖に戻って漁をしていた弟子たちに声をかけられたのは湖畔に立つ復活者イエスであり、また朝の食事まで整え待っていてくださったのは、復活された主イエスでした（21:1-14）。また忘れてならないのは、この 21 章が語る出会いの出来事が起こった時、福音書記者ヨハネの記述です。次のように記しているのは本当に印象的です。こうあります。「弟子たちはだれも、『あなたはどなたですか』と聞いたそうとはしなかった。主であることを知っていたからである。」（21:12）つまり弟子たちは、それが復活の主であることが分かっていた。つまり今日の 16:23 で預言されていること、「その日には、あなたがたはもはや、わたしに何も尋ねない。はっきり言っておく。あなたがたがわたしの名によって何かを父に願うならば、父はお与えになる。」云々

とありますが、“もう分かっているのだ”と、“どなたですか”と問い質そうとはしなかった、主であることを知っていたから、「その日には、あなたがたはもはや、わたしに何も尋ねない」とそのように語られています。

さて、主イエスはご自身の不在、すなわち地上での生の終わり、弟子たちとの別離について弟子たちに話していることを弟子たちは、一応理解はしているけれども、自分の死の意味について、主イエスご自身の死の意味について、また「しばらく」ということの意味については依前として弟子たちの理解は十分ではない、いや彼らの理解を超えている、そのことをイエスはよくよく分かっていました。彼らは 16 節のイエスの言葉、「しばらくすると、あなたがたはもうわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる」、すなわちイエスの不在、そして自分たちとの別離、そのことに直面してはつきり物が言えない状況に陥っていたことは明らかです。イエスの不在、そして別離、この事態に直面して弟子たちの悲しみは、彼らの言葉を根底から奪ってしまったように見受けられます。

イエスはこの弟子たちの心の内を鋭く見抜きます。そして弟子たちが問おうとしていること、「問題である、どうなのだろう」と問とうとしていることを、「新しい方向」に向けます。それが 20 節冒頭の言葉です。「はっきり言っておく。」元の言葉では「アーメン、アーメン」、「アーメン、アーメン。わたしはあなたがたに言う」、「アーメン」とはご承知のように“それがそうでありますように”、“それが本当のことでありますように”ということ。つまり、あることの実現を神ご自身がキリストにおいて“そうである・その通りである、然り、確かにそうなるのだ”というふうに言われていること、それが「アーメン、アーメン」です。この“そうである・その通りである・確かにそうなる・然り”、“そのことがイエスにおいて実現される”。なぜならば、神の約束がイエスにおいて“然り・アーメン”となったからです。しかもこの“然り”ということが、ヨハネ福音書では常にイエスによって重ねて繰り返されています。「アーメン」は、常にその確かな約束を根拠にした未来への出発の促しでもあります。私たちは「アーメン、本当にそうである、その通りである」と言いますが、それは「確かな約束を根拠にした未来への出発の促しだ」ということ。そのことを忘れてはならないと思います。

“アーメン”は聞く者を目覚めさせます。覚醒させます。目覚めさせ、迷いから覚まします。ですからイエスは「しばらく・ミクロン」という意味は“こうだ”とは説明しません。それを悲しみの時と、喜びの時として明らかにします。そのことが本質的なことだからです。悲しみの時は「しばらく」すれば喜びの時に変わるという、その「しばらくすれば」が真実だからです。この「しばらくすれば」、つまり「ミクロン・しばらくすれば」喜びの時に変わる。悲しみの時、それは「しばらくすれば」喜びの時に変わる。その「しばらくすれば」ということが真実だから、そう言えるのです。そしてこの「しばらくすれば」は「信仰においてのみ」、このイエスの言葉を信じることによってのみ、理解可能になる、そういう「しばらくすれば」なのであります。

くどいようですが、イエスはこの『真実』というものを、すなわち悲しみの時を「しばらくすれば」喜びの時に変わるという、「しばらくすれば」ということの『真実』を弟子たちがより理解しやすくするために一つの短い喩えを語っています。それが 21 節の喩えです。私たちが通常経験することを反映しながら、しかし旧約聖書で神の救いの到来を描くために用いられる「出産」、女性の「出産」という深い暗示を与える喩えによってイメージを大きく広げています。特にこの関係のあるのは、イザヤに出てくる「出産」の

譬えです。ここではイザヤの箇所は直接には引きませんが、イザヤ書に出てくる「出産」の喩えが、神による解放を待つ神の民の敬虔を表すために、またエルサレム回復を描くために、つまり苦難から新生へ、新しく生まれるということの喜びへと動いている神の民の敬虔というものを活き活きとして描く、そういう喩えとしてこの「出産」ということがこの使われています。

このヨハネ福音書 21 節の言葉遣いに着目してみたいと思います。21 節「女は子供を産むとき、苦しむものだ。自分の時が来たからである。しかし、子供が生まれると、一人の人間が世に生まれ出た喜びのために、もはやその苦痛を思い出さない。」

第一に、この「苦痛」と訳されている元の言葉は、普通出産に際しての女性の苦しみを描くだけには用いられない言葉、普通は用いられない言葉です。感情的な「苦痛」を表す言葉であって、肉体的な「苦痛」を表す言葉ではありません。しかしイエスは意図してこの言葉を用いています。

第二に、新共同訳聖書では「出産」の時、苦しむ者、女は子供を産むとき「苦しむもの」だ。「苦しむもの」と訳されているこの「苦惱」という言葉は、聖書では“神の国がこの世に入ってくる”、“神の国が入ってくる”という、そのことに先立って信仰共同体が耐え忍ぶであろう苦難と迫害を描くために用いられます。ですからイエスはこの喩えによって、ご自身の死、また別離、別れること、そのことの結果として“教会の中で起こるであろう変化・変容”、それは“終末的な変化や変容”のことですけれども、そのことをはっきりと伝えるために、この旧約聖書にある「出産」の比喩を用いていると言うことができると思います。そして弟子たちは『新しい民』、すなわち『喜びの民』となるであろう『新しい民』の誕生のことを言おうとしています。ヨハネでは、この誕生のイメージは、“イエスが彼を信じる人々に得させる新しい命を描く”ための非常に重要な比喩であります。そしてここでは、イエスの死と復活の結果として興ることが弟子たちにとっては“新しい誕生”なのだというように捉えられています。

さて 22 節、これは先ほど申し上げたように、主イエスを奪われ、泣いて途方に暮れる弟子たちが、イエスの再会を喜ぶ出来事です。22 節にはこうあります。「ところで、今はあなたがたも、悲しんでいる。しかし、わたしは再びあなたがたと会い、あなたがたは心から喜ぶことになる。」ここでも弟子たちがイエスを見るのではなくて、イエスが弟子たちを見る出来事としてこのことが興る、イエスはこの再会を弟子たちの悲しみを喜びに変える行為なのだと言っています。そしてイエスはこの弟子たちの喜びが“永遠であること、永久に続くのだ”と宣言します。

子供の誕生と同じようにイエスの復活は弟子たちの人生のコースを後戻りできない仕方です。そして弟子たちに起こったことが新しい神の民、新しい喜びの民である教会の中でも起こっている、教会に連なっている私たち一人一人の上にも、イエスの復活は私たちの人生のコースを後戻りできない仕方です。そして決定的に変えたということです。そのことが、教会の上にも、私たち一人一人の上にも起こっていると伝えようとしています。

今朝の聖書はイエスの復活の故に興った弟子たちの終末的な喜びの徴を、第一には、彼らには尋ねることが何もないということ。質問がもうなくなってしまう、そういうものとして弟子たちの終末的な喜びの徴というものを特徴づけています。そしてその弟子たちの終末的喜び、その日には混乱し不安に満ちた口籠りがちな質問は、もう一切発せられなくなってしまう。

そういう混乱と不安に満ちた質問はもう止むであろう。“全ての質問が沈黙し、何も説明の必要がなくなってしまうということ、それが喜びの性質なのだ”と言ってよいと思います。そのことが第一のこと。終末的な喜びの徴、それがもう質問は何もなくなってしまう、質問は沈黙し、何の説明も必要ない、そういうものになってしまう、そういう喜びなのだということ。

喜びの二つ目の特徴は、“祈りが応えられる”ということです。“祈りが応えられる”。どうして祈りが応えられるのか、それはイエスと神との関係を、弟子たちが完全に共にしている、イエスと神との関係、弟子たちもイエスと神との関係の中にびったりと入ってしまっている、それはどうしてか、ここでは明確に“イエスの名によって”です。“イエスの名によって私たちが祈る”、この「祈り」によって、神とイエスと教会、その相互関係が端的に言い表されている、弟子たちはイエスのように神が彼らの祈りを聞かれるという全き信頼において祈ることができる、なぜならばイエスによって終末的な喜びの中に私たちが置かれているからです。ですからイエスのように、神が私たちの祈りを聞かれる、必ず聞いてくださるという信頼において私たちは祈ることができるのです。

最初に発した問い、“私たちはどこでキリストにお会いできるのか”。まさに主イエス・キリストは、この主の日の礼拝に、復活の主として聖霊において私たち一人一人を訪ねてくださっています。そして私たち一人一人を、“新しい神の民、新しい喜びの民”として遇してくださっています。この神さまの「アーメン」、然りである「アーメン」そのものである主イエスの御事実の故に、私たちもこのことに「アーメン」をもって応えたい、と、そのように切に願うものであります。祈禱を献げます。

神さま、語りました言葉をあなたの聖霊の働きによって生ける命の言葉にしてください。どうかあなたの光が私たちを照らしてくださいますように。あなたの平和が私たちの間にありますように、主キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌:532「やすかれ、わがこころよ」

献金・感謝(二神康郎)・主の祈り

天に居します我らの救いの主なる天の父なる神さま、感謝いたします。今日も体調を整え、御肢に繋がる多くの兄弟姉妹たちと共に、御前に召され、賛美と礼拝を持つことができまして感謝でございます。

講壇の笠原先生を通じて、イエスの再臨によるイエスとの出会いができることの喜びが如何に素晴らしいか、ということを示されました。どうかこの希望を胸に抱き、この一週間も過ごすことができますようにお願いいたします。

ただいま献げましたものは僅かでございますが、どうか御用のためにお使いください。主によって示された『主の祈り』を共に祈って新しい週をスタートさせてください。「主の祈り」…アーメン。

讃美歌: 91「神の恵みゆたかに受け」

派遣:主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の清き交わりが、永遠にあるように。アーメン。

報告:週報記載「定期教会総会日程変更」の説明

後奏:「いざ喜べ、キリストのともがらよ」(M. ヴェックマン)

参考:★「苦痛」(スリプシス(Θλιψις)) [困難・難題・苦難・苦しみ・迫害・苦勞]新約で好んで転義的に用いるのは70人訳に対応。ヘブライ語では1)イスラエル民族の重大な危機状況(例えば出3:9, 4:31)〈ツァーラー(צָרָר [苦悩の叫び])〉〈ツァーラー(צָרָר) [苦難・痛めつける者・競争者]ダニ2:1〉。2)知恵文学からユダヤ教目次文学が受容した中心的な主題である、此処の義人の苦難(例えば詩33:20【新約聖書訳義事典Ⅱ194頁】)

◎ルペー(λύπη) & スリプシス(Θλιψις)考察(神学的背景)

1. 「苦しむ」【ギリシア語: λύπη(ルペー)】の意味

基本義: 悲しみ・心の痛み・内面的苦悩。感情に関わる語で、「心が沈む」「悲嘆する」というニュアンス。

ヨハネにおける用法; ヨハネ 16章では繰り返し使われ、「あなたがたは悲しむ」(λυπέω) [直未受2複(λυπηθήσεσθε)], 「その悲しみは喜びに変わる」、つまり一時的な重くの感情的悲嘆を指す。(20節)

背景となるヘブライ語 (LXX 対応) 七十人訳では主に次の語に対応する:

צָרָר (エツェガ) [悲しみ、心の痛み]、יָגוֹן (ヤーゴン) [嘆き、悲嘆]

例: 詩 13:2 (LXX 12:3) 「心に悲しみ(λύπη)」=ヘブライ語 יָגוֹן (ヤーゴン) したがって「ルペー」は内面的・心理的な悲しみを表します。

2. 「苦痛」【ギリシア語: Θλιψις (スリプシス)】の意味

基本義: 圧迫・押しつぶされる状態。転じて: 苦難、患難、外的試練。語源的には「押しつける・圧搾する」という動詞 θλίβω に由来。

ヨハ 16:21 でのニュアンス; 出産の文脈では「陣痛という身体的・現実的苦痛」、外から襲う避けられない圧力(現実的・身体的・状況的苦難)

3. 背景となるヘブライ語

詩 34:18 צָרָר (サーラー) [苦難、苦境、圧迫]。出 3:9 צָרָר (ラハス) [圧迫、虐待]を、70人訳は「Θλιψις」と訳す。

4. 出産の比喩の旧約的背景

ヨハ 16:21 の譬えは、旧約の預言のモチーフを強く踏まえている。代表的箇所は、イザ 26:17-18「身ごもった女が産みの苦しみで叫ぶように」、חִיָּהּ (タヒール) [身悶える] = חִיָּהּ (ヒイル) [悶える] (未完7パアル語)、この語の LXX ἐκέκρωσεν、原型「κράω」[喚く・大声で叫ぶ]。(産みの苦しみ)。その他、ミカ 4:9-10 シオンの娘が「産婦のようにもだえる」(苦難 → 回復/救いという構造)。エレ 30:6-7「男が産みの苦しみのように苦しむ」、「(ヤコブの)苦難の時(צָרָר צָרָר) (エト・ツァーラー=) צָרָר (ツァーラー) [苦難]。重要なのは、苦難(Θλιψις/צָרָר)は、救い誕生の前触れであるということ。

参考: ◎「出産の喩え」; 対比「ルペー」&「スリプシス」⇒「苦難から新生へと動いている神の民」

観点	ルペー (λύπη)	スリプシス (Θλιψις)
性質	内面的・感情的	外的・状況的
内容	悲しみ・嘆き	圧迫・苦難
ヘブライ語	יָגוֹן, צָרָר	צָרָר, צָרָר
出産比喩	心の悲しみ	陣痛の苦痛
出産比喩	心の悲しみ	陣痛の苦痛

★二つの語「ルペー」「スリプシス」が重ねられている神学的意義(ヨハネの視点)、ヨハネ 16章では、弟子たちのルペー (悲しみ) → イエスの死による喪失感
同時にスリプシス (苦難) → 十字架という歴史的・現実的出来事へ

しかし最終的に「その苦しみを忘れてしまうほどの喜び」、これは旧約の「産みの苦しみ → 救いの誕生」という預言的構造を受け継ぎ、「十字架の苦難が復活の喜びを生む」というヨハネ神学の核心を表している。